

京大吉田寮の保全活用を求める共同 声明への賛同と連名を呼び掛けます

私たちは、京都大学吉田寮の卒寮生でつくる「21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会」の理事を務めております。この会は、学生寄宿舍の同窓組織が行ってきた世代を超えた交流を、現在の寮生も含めてあらためてつくり、吉田寮が歴史的に果たしてきた教育的役割が21世紀により発揮されるように願い、昨年10月に京都大学楽友会館で設立総会を開き、発足しました。1950年代に在寮した世代から最近卒業した世代までが会員となっており、さらに広く参加を呼びかけております。

吉田寮の存続を願い、「京都大学学生寄宿舍吉田寮の保全と活用」 を求める卒寮生と市民の共同声明(裏面)を京大に提出します



吉田寮を巡る昨今の情勢を鑑み、吉田寮の保全と活用を求める共同声明を京大に提出することを呼び掛けます。

京都大学が昨年12月19日、「吉田寮生の安全確保についての基本方針」を突如として公表し、今年9月末までに吉田寮生全員の退去を求めるという一方的通告を行いました。川添信介理事をはじめとする大学当局が、吉田寮自治会との話し合いを誠実に進めようとしな

い対応を続けていることに危惧を抱き、理事会で検討し、卒寮生と市民の共同声明(裏面)を発表し、山極壽一総長と川添理事に提出することを決めました。京大での記者会見と文書提出を9月27日(木)に行います。多くの方が吉田寮の存続を願っていることを京大当局に伝えたく、連名への協力をお願いいたします。

賛同していただけるのでしたら、メールで共同声明に連名する旨をお書きいただき。卒寮生の方は氏名と寮を出た年と学部を(例=吉田 良生・1950年卒寮・文)、市民の方は氏名と居住の市町村と京大卒業生の方は卒業年も(例=みやこ きょうこ・京都市・2000年卒)それぞれ書いて、下記の事務局富岡までメールでお送りいただけませんか。9月23日(日)を集約日とさせていただきます。同日午前10時より京大時計台で元寮生の会の総会を開催します。署名を会場に持ってきていただいても結構です。

「21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会」理事一同(卒寮年・学部)

奈倉道隆(1960年・医)、中尾芳治(1958年・文)、広原盛明(1961年・工)、
亀岡哲也(1989年・文)、富岡勝(1989年・教育)、盛田良治(1991年・文)、
稲庭篤(1991年・理)

事務局 〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部 富岡勝研究室内 富岡勝 tomiokamasa@kindai.ac.jp

「京都大学学生寄宿舍吉田寮の保全と活用」 を求める卒業生と市民の共同声明

私たちは吉田寮の卒業生と市民です

私たちは京大吉田寮にかつて生活していたものと吉田寮に関心を寄せる市民です。京大が昨年12月19日に公表した「吉田寮生の安全確保についての基本方針」において吉田寮に入舎している全ての学生の退去を求めた9月30日を前に、山極寿一総長と川添信介理事に対して吉田寮の保全と活用を求める要望を共同声明として発表いたします。

吉田寮の現棟は京大の誇るべき財産です

まず私たちは、築100年以上を経過した吉田寮の現棟について、歴史的建造物としての保全と活用を求めます。老朽化し、耐震性を著しく欠くことについて異論はありませんが、現存最古の京大の建築物であり、旧制三高の寄宿舍の解体後の建材も一部引き継いでいる京大の誇るべき財産といえる建物であります。現棟の取り壊しは、日本の高等教育の歴史の「生き証人」ともいえる建造物が失われることとなります。その価値は、「近代日本の歴史的建築資産としてかけがえのない存在である」として2015年に日本建築学会近畿支部と建築史学会からそれぞれ出された吉田寮の保全などを求める要望書からも明らかです。

木造寄宿舍の現代的な活用を求めます

吉田寮については、耐震補強をして一部を残すという案も、京大当局から提案されていた経緯もあります、しかし、先述の基本方針は、「吉田寮現棟の老朽化対策については、本学学生の福利厚生の一層の充実のために収容定員の増加を念頭に置きつつ、検討を進める」とするのみで、歴史的建造物としての活用について言及はありません。大学の国際化が進んでおりますが、日本の風土に根ざした木造寄宿舍の現代的な活用も、「千年の都」にある京大に求められていることではないでしょうか。

これまでも大学と学生は話し合いを重ねてきました

さらに、この間の京大当局による学生に対する対応について、私たちは懸念を強めております。吉田寮は開設当初より学生による自治が志向されてきました。その精神は伝統的に引き継がれ、学生が自らを律して成長する場になっておりました。大学による一方的で強権的な処置は、京大が長年にわたって醸成してきた、自由闊達と自主自律の精神を損ないかねないと考えます。

かつても吉田寮を巡って大学と学生が対立する状況がいくたびもありました。しかしながら、双方が粘り強く対話を続けることで、困難な事態を打開してきました。老朽化を理由に設定された1986年3月末の「吉田寮在寮期限」について、解決に尽力された当時の総長の西島安則氏は、在寮期限設定に伴う措置の執行完了にあたっての所感（1989年7月7日、京大広報375号）で、「本学の学寮の歴史を振り返り、京都大学らしい解決方法を熟考した」として、当時の河合隼雄学生部長と吉田寮自治会が話し合いを重ね、吉田寮自治会との合意に基づき、「京都大学らしい学寮の歴史の中で意義ある一歩が踏み出されたものと私は信じる」と記述しています。

京大らしい解決を望みます

京大らしい解決とはどのようなものか、学外にいる私たちが示すものではありませんが、ぜひともいま一度お考えいただき、学生たちとの話し合いを通じて、西島氏が書き記した「問題の正しい解決」のために尽力していただくよう、心から望むところであります。

呼び掛け人 「21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会」理事一同（卒業生・学部）

奈倉道隆（1960年・医）、中尾芳治（1958年・文）、広原盛明（1961年・工）、亀岡哲也（1989年・文）、富岡勝（1989年・教育）、盛田良治（1991年・文）、稲庭篤（1991年・理）